

JICA 平成 24 年度「中国じん肺診断研修」における 中国でのじん肺症例検討会の実施について

機構の粉じん等による呼吸器疾患研究グループと石綿関連疾患研究グループは、国際協力機構（JICA）の依頼により、昨年度から中国の研究者・医師に対して、じん肺・石綿に係る健康管理等に関する研修会を行ってきた。本年度は、6月に2回目となる研修会を江蘇省からの8名の参加者に対して総合研修センターにおいて実施した。その研修の成果を確認し、さらに、研修参加者を中心にその知識を中国で広範なものとするを目的として、8月10日に中国でじん肺症例検討会を行った。この検討会には、北海道中央労災病院木村院長と岡山労災病院岸本副院長が参加した。

この検討会に先立って8月8日に、北京市中国疾病予防センター（CDC）で、木村院長が「日本におけるじん肺の現状と最近の我々の研究」、岸本副院長が「日本における石綿曝露による中皮腫及び石綿肺癌の研究」と題する講演を行った。中国側からは李涛 CDC 所長が「中国におけるじん肺研究の現状等」の講演を行い、中国では2007年からじん肺が急増し、職業性疾病の大半を占めているという現状の報告があった。



北京市中国疾病予防センターにおける講演会（北京市）

8月10日には、蘇州市に移動して、今回の主目的である「じん肺症例検討会」に参加した。中国側の参加者は約40名で、検討会の冒頭には、日中協力プロジェクト「職業衛生能力強化プロジェクト」のJICA尾澤首席顧問から検討会の目的や意義が示され、両先生の紹介もなされた。



症例検討会の様子（蘇州市）

検討会は、6月に日本で行われた研修会に参加した医師を中心に4班に分かれ、5症例について検討がなされた。検討会には、木村院長と岸本副院長も随時加わって日中の医師による熱心な討論が交わされたため、午前9時から午後5時までがあつという間に経過したと思われるほど熱心な検討会となった。用意された5症例は典型的な石綿肺例を始め、炭坑夫じん肺で不整形陰影を伴う例、インジウム肺が疑われる例など、いずれも興味深い例であった。

またこの5症例以外にも、昼食時間にこれまであまり経験したことのないような多彩な個別事案に対する意見が求められるなど、中国のじん肺診断を担当している医師の日本の専門家に対する大きな期待を直接感じる機会となった。そして、この日中協力プロジェクト「職業衛生能力強化プロジェクト」における労働者健康福祉機構の我々のグループの担う役割は、非常に大きなものであることが改めて感じられた。

なお、このプロジェクトに基づき、10月には蘇州市を中心とした8名の医師が研修を受けるため来日する予定となっている。



参加者全員で記念写真（蘇州市）